

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520562

研究課題名(和文)日本語Can-do statements項目の解釈に関わる基礎研究

研究課題名(英文)Study on Learners' comprehension of Can-do statements items

研究代表者

鹿嶋 彰(Kashima, Akira)

弘前大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：60372281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、まず第一に国内、海外(台湾、タイ)で実際に取った、自己評価がどのように行われたかというデータによって、個人間や学習環境や言語能力が異なるグループ間に見られる「ばらつき」が単に個人のスケールに帰結せず様々な要因から派生していることをあぶり出したこと、特に海外で自己評価Cdsを使用するときの注意点をいくつか喚起できたこと、第二に海外(特にタイ)での経年調査により、自己評価の「ゆれ」がどのような要因に関わり、どんな習得の過程で出てくるかについての考察を可能にしたことの二点である。

研究成果の概要(英文)：The major outcomes of this study are the following three: One, the points from the self-evaluation activities vary as each individuals and groups with different backgrounds have sense of scale and apply their scale differently at the time of evaluation. However, the data taken from the learners of Japanese both in Japan and overseas (Taiwan and Thailand this time) can make it possible to consider that the unevenness in evaluation points is due to multiple factors. Two, the study provides some suggestion with regard to how the Cds made in Japan is used to the learners in overseas countries. Three, the multiple surveys made to a certain numbers of individual make it possible to consider how the unevenness of evaluation points happens. (unevenness such as lower points in the following year although the one's language performance is improved)

研究分野：日本語教育

 キーワード：国際情報交換 Cdsによる自己評価 自己評価の「ばらつき」 自己評価の「ゆれ」 JFL学習者 タイ  
台湾

## 1. 研究開始当初の背景

従来言語能力の評価は、教師主導型評価法である言語テストによるものが一般的だった。しかし、いわゆる学校以外の場所で学ぶ学習者や、言語の4技能の能力を均等には求めない学習者が出てくるなど、学習者とその学習目的、学習環境が多様化するにつれ、教師主導型評価だけでなく、学習者主導型の評価法の必要性が認識されてきた。学習者が主体となる評価法には、ポートフォリオ、ピアアセスメント、自己評価などがあり、Can-do statements (以下 Cds) による自己評価はその一例である。

Cds による自己評価とは、例えば「医者に病気の症状を説明することができるか」のような能力記述文を提示し、それに対して「できる」「できない」を自己評価により回答させるものである。Cds による自己評価は、過去の研究で、信頼性が高い(例:三枝 2004)、妥当性が高い(例:野口他 2007)といった評価がある一方、妥当性の低い尺度であるという報告(例:玉岡他 2005)もある。また個々の学習者に注目すると、同じような言語能力を持つ学習者でも、自己評価にばらつきが見られることは想像に難くない。このようなばらつきが見られる一要因として、Cds の項目から想起する場面や状況が一定していないことが挙げられるが、Cds による自己評価について、評価者が項目からどんな場面や状況を想起するかについてよく分かっていなかった。

## 2. 研究の目的

Can-do statements(以下 Cds)による自己評価は、様々な目的に有効な票かツールである一方、個々の項目を回答者がどのように解釈するかによって、自己評価が変わるという分析がある。そこで、本研究では、日本語の学習者を対象に、国内の学習者が海外の学習者かを中心にした学習環境、母語、レベル別

に、Cds の個々の項目がどのように解釈されるかについての基礎情報を得ることを目的とする。

具体的には、主に中級日本語を習得している学習者を対象に次の3点を、本研究の主目的とする。

Cds 項目が実際にどのように解釈されているかを、インタビュー調査を通じ明らかにすること。

「前項で明らかになった解釈の仕方」(特に「個人間のばらつき」「個人内のゆれ」を派生するような解釈の仕方)が Cds 自己評価にどのような影響を与えるか、ということへの資料を得る。

可能なら、Cds 項目がどのように解釈されると、解釈に大きな相違が出ることを防げるかという問題について考察を加える。

## 3. 研究の方法

### データ収集のための研究体制作り

研究協力者との連携で、経年調査が可能な調査参加者を得る、適切な通訳者を得る。

### データ収集のための調査

母語集団別に、Cds 項目(話す、聞く)についての質問紙調査、インタビュー調査を行い、Cds 項目がどのように理解されたかのデータを得る。データは同じ回答者から1年程度の間隔で複数回取る。

### データ分析、成果の公表

特に、個人間の「ばらつき」、個人内の「ゆれ」の大きい項目につき、その理由の分析を行い、結果の公表をする。

## 4. 研究成果

国内の学習者、海外の学習者間の回答傾向の「ばらつき」と、そこから得られる海外で Cds を使用する場合の注意について

### (目的)

本研究は、国内と台湾の日本語学習者では自己評価に違った傾向があるのか、あるならどんな異なりなのか、それがどんな要因から来ているのかを考察し、特に海外で Cds による自己評価をするためにどんな注意が必要かを考えようとするものである。

### (方法)

N2 レベルと N3 レベルの国内と海外(台湾)の N2 相当と N3 相当の学習者(台湾)に、Cds を用いた自己評価をしてもらい、国内の学習者と台湾の学習者それぞれの N3 グループと N2 グループの差を観察した。N2 の方が N3 より能力が高いので、 $N2 > N3$  となるはずであるが、実際には4つのパターンが観察され、本研究では、そのパターンに合致する4項目を用いて分析を行い、なぜその4つのパターンが生じるかの理由を分析した。

4つのパターンとは、次の通りである。

パターン1：国内  $N2 < N3$ ，台湾  $N2 > N3$

項目42「医者に病気の症状を説明できますか」

パターン2：国内台湾ともに  $N2 > N3$

$N2, N3$  ともに国内  $>$  台湾

項目51「パーティーや公式の席で挨拶やスピーチができますか」

パターン3：国内  $N2 > N3$ ，台湾  $N2 > N3$

項目54「アルバイトの面接の時に、自分の能力などについての質問に適切に答えられますか」

パターン2：国内台湾ともに  $N2 > N3$

$N2, N3$  ともに国内 = 台湾

項目55「相手の気持ちを傷つけずに断ることができますか」

### (考察)

項目42では、海外学習者の自己評価は主に授業で習った内容によって作られている場面知識をもとに評価しているのに対し、国

内学習者の場合は、特殊経験を含む多彩な生活経験から、病院経験の有無に関わらず、より現実的な場面知識をベースにして評価している、という違いがあると考えられると結論づけた。

項目51では、海外の学習者の自己評価が国内のそれに比べ著しく低く、不安要因が多く回答されていることから、海外の学習者がこの場面を難しい場面であると解釈しているために起きていると結論づけた。

項目54では、海外では経験の欠如、面接の背景知識の欠如から、日本語能力とは関係のないところで自己評価が決まってしまう可能性が示唆されていると結論づけた。

項目55では、国内海外問わず基本になる学校で習った表現の熟達度を判断することを要求しているために、国内海外の学習者が同じような場面を想定するため、学習者自身の日本語能力の判断が出やすいと結論づけた。

### (結論)

本研究の分析より、国内と海外では、学習環境の違いから、想起する場面や回答者の場面知識や経験の異なり、言語外要因の関わり等の要因により項目の解釈に違いが生じることがあるという結果を得た。そして重要なのは特に日本語場面に参加しにくい海外の学習者の自己評価の目的には、適している場面と適していない場面があるように思えるということである。

項目42は、母語場面でも遭遇する場面であるが、海外学習者がリアリティを持って接することのできる場面ではないかもしれない。項目51は日本語場面が少ない学習者にとっては、不安要因が多く出るくらい難しい課題であると認識されていて、実際にそれが難しいかどうかを確認する手立ては少ない。項目54は背景知識や経験がないと、実際の日本語能力とは別のところで自己評価が成り立ってしまう。以上3つの項目は、海外学習者の回答傾向が国内の学習者のとは異なっていたものである。このような項目は自己評価にそのまま使うのは適切ではなく、国内の学習者と同じような回答傾向を示すよう

に変えていく必要があるだろう。

ただし、こういった意見は、本研究の結論が正しいことを前提に行っているものであるが、まだ結論自体も仮説の域を出ていないのでさらに精密な議論をしていかなければならないのは論を俟たない

「ゆれ」について

- 1 . 「ゆれ 1」

(目的)

「話す」分野に限定し、国外の日本語学習者に見られる自己評価の「ゆれ」に注目し、その原因の考察を行うこと。

(分析)

・観察された「ゆれ」が、下記3要因とどう関わっているかを考察する。

- 1) 項目のタイプ(単純発話、やりとり)、
- 2) 場面知識のタイプ(日常、非日常)、
- 3) 経験の有無

(分かったこと)

- 1) やりとり項目について、話題や場面の理解が深まっているのに、自己評価が下がる場合がある。例：項目 50
- 2) 単純発話項目で、非日常的な知識を要する話題を含む項目の場合、経験の少ないものほど自己評価のポイントが下がる傾向がある。
- 3) 非日常的な難しい知識を要求しないと考えられているような項目(例：料理)では、言語能力があまり高くなくても評価ポイントが上がったり高止まりしたりすることがある。

- 2 . 「ゆれ 2」

(目的)

自己評価による「ゆれ」とは、経年データを見たとき、ある一時点の評価ポイントが、その前の会の評価ポイントに比べ、著しく上

がったり落ちたりしてしまうことを指す。

2014 年に行った発表では、調査に 2 年連続で参加してくれた 8 名の回答者に分析を行った。しかし、「ゆれ」を十分に観察することができなかった。そこで、本研究では、自己評価の「ゆれ」を取り上げ、海外の日本語学習者で自己評価の傾向が異なる学習者 2 名(W, A の 2 名とする)の 3 年間の経年データの比較を通じ、「ゆれ」の発生を促進する要因、抑制する要因について考察することとした。

観察された「ゆれ」で、課題遂行能力の向上以外の理由で「ゆれ」が起きていないと考えられる例を検討する。

- A. 日本語能力は伸びているのに、評価ポイントは下がっている例
- B) 課題遂行に要する知識が日常的な知識のみに限られ「易しい課題」と考えられたため、自己評価が高くなった例
- C) 不安要因が減少するにつれ、自己評価が上がっている例

(結論)

A~C の考察を通じて分かったのは下記のようなことである。

課題の理解が進む等の理由により、課題に必要な知識などへの要求度が高まった時に「ゆれ」が起きる。

課題遂行に要する知識が日常的な知識のみに限られる項目では、課題遂行ができなくても自己評価は高くなり、「ゆれ」が減少することがある。

不安要因は習得が進むにつれ減少方向に向かい、「ゆれ」を減少させることがある。

については、項目 48 の例のように、日本語に置き換えられるかどうかだけでなく、ト

ピックに対する知識の問題や、それをどのように説明すればいいかという場面知識などを考慮に入れた場合、課題自体が難しいものと認識されるようになり、「ゆれ」が起きることがある、と考える良さそうである。

については、2013年の調査でも同じ傾向が出ていた。しかし、今回3年目の調査から得たデータからも、回答自体は変わっていないのに、評価が高止まりの傾向は変わっていない。実際に会話をしてもらったが、他の項目では、Wは聞き手が自分の発話を理解できるようにするために、聞き手に対しての配慮を持っているにもかかわらず、この項目については、聞き手の日本語話者が理解できるような配慮ある説明は必ずしもできていない。それにもかかわらず自己評価点は高止まりしており、この傾向は他の調査参加者の回答でも同様である。ここから、ある項目が「やさしい」項目であるとの認識は変わりにくいものであることが言えそうである。

については、これが言語能力の向上の結果なのか、それとも不安が無くなった結果なのかはそれほど明らかでないが、以前現れていた「不安」が現れなくなったため、「不安」の影響が介在しているとした。

現在までの分析では、評価ポイントが際立って高まっている例が、単に日本語能力の上昇なのか、それともそれ以外の要因の方が大きいのかを特定する方法を使う方法が十分でなかった。今後は、同様なデータをもう少し積み重ねるだけでなく、特に日本語力が上昇した以外の要因で、自己評価が上昇した上のケースの分析が行えるようにし、ここでの考察を深めたいと考えている。

### - 3 「ゆれ」

(目的)

Cdsの「話す」に限定し、「ゆれ」について分析することにより、その学習者の自己評価基準の一端を明らかにすること。

(分析方法)

ある海外の日本語学習者に4年間に渡り1年間隔で4回Cds項目の自己評価をについて、質問紙とそれに基づいたインタビューを実施した。インタビューでは、想起した場面や自己評価に影響をおよぼした非言語要因についてのデータを収集した。

分析では、自己評価ポイントおよびインタビューデータについて、「心理要因」「背景知識に関わる要因」「調査課題に関わる要因」に着目し、

- 1) Cdsの自己評価基準の経年変化とこれら3要因の関係、
- 2) 「ゆれ」が見られたCds項目とこれら3要因の関係

この2点について考察した。

(分かったこと)

1) について：

- ・言語能力が上がるにつれ、言語使用への要求度が上がり、不安等の言語外要因が減少していった。
- ・特別な背景知識をが必要な項目、苦手間のような心理要因が関係する項目は自己評価が伸びない。
- ・上記以外の課題は、言語使用への要求度が上がっているにもかかわらず自己評価ポイントが上がっている。

2) について：

「ゆれ」には下記2種類が確認された。

- ) 「流暢さ」への期待度が高くなったために起きる「ゆれ」
- ) 言語理解や産出に背景知識が重要であることが意識される結果起きる「ゆれ」

- ・同じような要求は「ゆれ」の確認でき

なかった項目にも見られる。このことから、「ゆれ」は言語能力や背景知識への要求が、たまたま自分が持っている能力や背景知識を超えたと判断されたときに出る一時的な現象である可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 4件)

鹿嶋彰・保坂敏子・島田めぐみ(2012)  
「Can-do statements 項目から回答者は何を想起するか -国内と海外の日本語学習者の比較から-」NAGOYA-ICJLE 日本語教育国際研究大会

鹿嶋彰(2014)「Can-do statements による自己評価の『ゆれ』はどこから来るか -海外の日本語学習者に対する経年調査から-」SYDNEY-ICJLE 日本語教育国際研究大会

鹿嶋彰(2015)「Can-do statements 『話す能力』の項目解釈に見られる『ゆれ』の事例研究 -海外の日本語学習者に対する経年調査例から-」沖縄県日本語教育研究会第12回大会

鹿嶋彰(2016)「Can-do statements 『話す能力』の自己評価基準の考察 -ある日本語学習者の自己評価の変遷事例から-」ICJLE-BALI 日本語教育国際研究大会(予定)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：

権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等、

6. 研究組織

(1)研究代表者

鹿嶋 彰 (Kashima, Akira)

弘前大学国際教育センター(准教授)

研究者番号：60372281

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：